
ギミック世界のワンダラー

トルサージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギミック世界のワンダラー

【Nコード】

N3153Y

【作者名】

トルサージ

【あらすじ】

ひたすら小説を書き続ける男が繰り広げる、果てない妄想と恋愛模様とは―？

妄想や幻覚、擬人化生物が織り成すコミカルメタフィクション＋恋愛小説。「全38話」

第1話 創作男と毬藻

巷では三連休らしいが、俺はベッドに入ってうたた寝を繰り返しながらぼんやりと一日を過ごした。

もそもそと起きだして煙草に火をつけ、窓の外を眺める。白い煙の向こうに雨の雫が流線型の跡を残し窓をつたう。

三次選考で落選した小説の、編集部からの書評がゴミ箱の中に捨てられていた。

ストーリー	∴	B +
キャラクター	∴	B +
設定	∴	B
オリジナリティ	∴	B +
文章力	∴	A
総合	∴	B +

評価はA、B +、B、B -、Cの5段階。三次選考ともなれば、総合判定でAに達しなければ落選となる。

判で押したように毎回似たような書評が送られてくるが、賞には一度も辿り着いたことがない。「あと一息」を延々と繰り返して、早や数年が経っていた。

煙草の煙とともに大きな溜息が口から漏れる。

窓を叩く雨の音だけが、湿った部屋の中に響く。一日中、同じ雨が降っていた。

「元気ないですね？」

背後からの間延びした声に振り返ると、りもんが相変わらず人懐っこいような笑顔を浮かべて立っていた。

「マキさん、大丈夫ですか？」

「…ああ。梅雨時は気が滅入る」

「本当？」

ちよつと意地悪そうにそう言っていると、りもんはゴミ箱から書評を拾い上げる。

「実はこれが原因ですね」

「目ざとい奴だな」

りもんは仰々しく咳払いをして、選評シートを読み上げる。

「『多くを語らずに主人公の心情を読み手に考えさせる文章力と描写力は高い。だがストーリーの展開とカタルシスに欠ける。捻りの効いた次回作に期待』、だそうですね」

「もう聞き飽きた」

苛立たしげに煙草を揉み消すと、ひとすじの絹のような細い煙が灰皿から微かに立ちのぼる。

「…『カタルシス』って、何ですか？」

「さあな」

不貞腐れて再びベッドに潜り込む。辛辣とも賛辞ともいえない微妙な書評が俺にもたらしたのは、精神の浄化ではなく漠然としたストレスだけだった。

*

「こんなのお気にせずう」元氣出あして」

りもんは書評を再びゴミ箱に投げ捨て、緑色のミニスカートをひらひらと靡かせ歌い始めた。

緑色の髪の毛に緑色の大きな瞳。秋葉原が似合いそうな緑色のコスプレ衣装には、ご丁寧に緑色の触角まで生えている。

『りもん』は、俺の飼っているマリモだ。

マリモが何故擬人化して目の前に居るのか？

それは酷い妄想癖のある俺にとって、さして問題ではない。

元々は知り合いから北海道土産で貰ったもので、もう1年以上世話をしている。

マリモというのは文字通り『毬藻』なので、時々小さな水槽から取り出して手の平で丸めてあげなければいけない。そうすると、なんとなく元気になったように見える。

俺はいつしかこの緑色でふわふわした小さなマリモに、『りもん』と名前を付けていた。

もし俺以外の世界の全ての人がエキストラだったとしたら、毬藻の一人や二人が擬人化して目の前に現れても何ら不思議じゃないだろう？

むしろそう考えた方が、少しは気も安らぐというものだ。

「くじけず前向ういて」七転八倒お」

「それ違うぞ」

「陽気にいゝ笑ってえ」

大きな眼を瞬かせくると回りながら踊るりもんを見て、苦笑いする。

会社が休みの日には、一人暮らしのアパートに籠ってひたすら小説を書いている。

一日中脳内でのプロット作成と、パソコンに向かっての執筆。時には布団に入ってもキーボードを叩き続けている。高校の時からずっとそんなことばかり繰り返してきた。

そんな人間が陽気な筈が無かるう。

子供の頃は『空想癖』で済んでいたものが、年齢を重ねていく度に『妄想狂』に変わっていった。気付くと残されたのは、吸殻で溢れ返った灰皿とフォルダに格納された300を超えるオリジナル小

説、そして毎回『次回作に期待』という編集部からの書評だけだった。

*

俺の名前は、牧本束。『束』と書いて『たばね』と読む。

何故親がこんな名前を付けたのか、未だに分からない。友達も居なくて自分の行く末すら見えない俺に、いったい何を束ねるというのだろう？

相変わらず暢気に唄い続けるりもんの頭をそつと撫でてやると、りもんは子猫のように目を細めて『にやにや』と照れた。

バタバタと窓を叩く雨に振り返り、灰色の窓の外を眺める。

目覚める度に思うことがある。

グレゴール・ザムザは巨大な毒虫に変身していたが、果たして俺は何に変身しているのだろう、と。

第2話 突然、炎のごとく

通勤中に『箱男』を読んでいると、電車の中で突然カバンを頭からかぶりたくなる衝動にかられる。

それだけで、世界の全てが変わる気がした。

昔この小説をモチーフに『箱女』という小説を書いたことがある。内容はより現代的に、高校生の彼女が突然ダンボールの箱をかぶって現れるという短編作品だった。

その小説は、未だに俺のパソコンの片隅に埋まっている。おそらく日の目を見ることはないだろう。

小説の投稿サイトに公開したもののや公募小説に応募したのは、ほんの十数作品。他の殆どの小説はデスクトップのデータフォルダの中に埋もれている。

中には書いたことすら全く記憶に無い作品もある。

幾千の文字の中で踊り、無限の妄想の中で俺は自分を失っていく。実際に箱をかぶっていないだけで、隔絶した閉塞感は何処に居ても同じなのかもしれない。

ふと外を振り返ると、地下鉄の窓に映る通路灯が瞬間的に闇の中に流されていった。

*

常に小説の妄想に囚われ続ける俺が、会社に行ってもまともに仕事をこなせる筈が無い。

出社してデスクに着くより前に、早速上司に呼び止められる。嫌

味と溜息混じりの上司の小言は、始業開始のチャイムまで続いた。

しぶしぶ席に戻る俺を見て、隣の席の東川咲奈が椅子を近づけてくる。

「昨日の報告書ですか？」

「…文章量が多すぎたらしい」

やり直しを命じられた報告書の束を、団扇のように扇ぐ。

「マキさんの報告書って、小説みたいですよ」

「文章書き始めると、止まらなくなるんだよ」

「報告書でも？」

「やっぱりマズかったな」

ネクタイを緩めながら苦笑いする俺は、さぞかし卑屈に映るだろう。

「…わざとですよ」

上司から見えないように東川咲奈は隠れて小さな笑顔を見せる。

栗鼠のように大きな瞳が、眼鏡の奥から覗きこむ。

「知ってたのか？」

「マキさんって、分かかってやるんですから」

「……」

「コピー、入れてきますね」

口の端を上げてそう言っていると、東川咲奈は席を立つ。俺のデスクの上に、いつの間にか琥珀色をした飴がひとつ置いてあった。

実は上司の望むような要旨を簡潔明瞭にまとめた報告書も、もう既にデスクトップの片隅に作ってある。小説と同じく報告書でも様々なバリエーションを作ってみただけだ。

「まいったな……」

小さく呟き、その飴を口の中に放り込んだ。

ちなみに俺は知り合いから『マキ』と呼ばれている。でもこの職場で俺をそう呼ぶのは、2年後輩の東川咲奈しか居ない。

社内引きこもりを実践している俺に、何故彼女だけが話しかけてくるのか？

この時の俺には、知る由もなかった。

*

昼休みに携帯電話を開いていると、突然背後から東川咲奈が話しかけてきた。

「あれ？マキさんもメールなんてやるんですか？」

画面を見つめたまま、冷やかな声で返す。

「俺だつて友達くらい居る…稀少だけど」

「冗談ですよ」

くすりと笑って、彼女は後ろから携帯電話のディスプレイを覗き込む。シンプルな七分袖のブラウスから細い腕が伸びてきて、俺の携帯電話のフレームをそつと押さえる。

「誰からです？んん、神楽さんですね！」

「お、思い切りプライバシー侵害されてるんだが」

微かに柑橘系の香水の匂いがして、思わず振り返るのを躊躇してしまう。そんな俺の一瞬の戸惑いなど全く意に返さず、東川咲奈は相変わらず無邪気に話しかけてくる。

「あはは。で、神楽さん何の用ですか？」

俺は携帯電話をポケットに入れると、極力動揺を隠すように立ち上がった。

「ああ。今日の夜、神楽と辻と飲みに行くんだよ。その店の連絡」

「仲良いんですね、マキさん達の同期って」

「そうでもない。三人だけだよ」

皮肉混じりにそう言うと、俺は喫煙室に向かう。

普段ならそれで会話も終わっていた筈なのに、何故か東川咲奈は俺の後を付いてくる。

「な、なんだ東川？煙草吸うようになったのか？」

「まさか」。ジューズ買いに行くだけです」

何となくさっきの動揺を見透かされた気がして、微妙な居心地の悪さを感じつつ喫煙室に入る。

昼休みも早い時間だったので、喫煙室にはまだ誰も居なかった。きよろきよろと辺りを見渡しながら、東川咲奈は喫煙室の自販機に向かう。

部署の中で東川咲奈とだけは話が出るのも、彼女が新入社員だった時に俺が研修担当だったからだ。もしそうでなければ、まともに話す機会すら無かっただろう。

排煙機のスイッチを入れ煙草に火をつけると、立上る煙が微かにモーターの呻る排煙機に一瞬で吸い込まれていく。

吸気口を怪訝そうな表情で見つめる俺に、レモンティーのカップを持ったまま東川咲奈が話しかけてくる。

「何神妙な顔してるんですか？」

「…煙草の煙」

「煙？」

「俺、空中に拡散していく青白い煙を見るのが好きなんだけど…どうも排煙機ってのは味気ない」

「へえ」。男の人って、そういうものなんですね」

意外そうな表情を浮かべて、東川咲奈はセミロングの髪の毛先をくるくると手で弄ぶ。…それがいつもの彼女の癖。

少しの沈黙の後、先に口を開いたのは東川咲奈だった。

「マキさん、えーと…。今度、一緒に映画観に行きませんか？」

唐突な彼女の言葉に、俺はただ排煙機に吸い込まれる煙を見つめる…。フリをするしかなかった。

手にした煙草が、その灰の形を残したまま長く燃え尽きているのにも気付かずに。

第3話 直交座標系恋愛方程式

「そや、こないだ取引先の受付の娘から辻のアドレス聞かれたぞ」

「ええ？もしかして教えちゃったの？神楽君！？」

「そらもちろん、教えた」

箸を咥えたまま、神楽輝延は座敷の柱に寄りかかりわざと品なく笑う。

行きつけの居酒屋で、俺達はいつもの座敷席に座り飲んでいた。

「勝手に僕の個人情報を！」

「ええやんか。辻だってまんざらでもないやろ」

「まあ、そりゃそうだけど……」

さつきから対面で神楽にからかわれているのが、辻健市。

関西人丸出しの神楽と、お坊ちゃん気質の辻の掛け合いは見るだけで楽しい。

冷えたグラスのビールを喉の奥に流し込み、斜に咥えた煙草に火をつける。

それぞれ社外に出向している為に最近はこうして顔を合わせる機会も少なくなっただけれど、同期で入社した時から俺達三人は何となく波長が合った。

「辻みたいな草食系が、もて囃される時代なんだな」

「マキ君まで」

頬を膨らませる小柄な辻の姿は、そっちの気は無くても可愛らしく見える。

「褒めてんだよ。受付嬢に見初められるなんて光栄じゃないか？」

「ぼ、僕は派手な人は好きじゃないのだ」

照れる辻のさらさらの髪の毛を、神楽がくしゃくしゃに掻き毟る。
「何言うてんねん！これから合コンの段取り決めるんやからな！」
「やっぱりそれが目的じゃないか〜！」

俗っぽいやり取りも、不思議と気にならない。軽薄感を洒落として愉しむことのできる二人だからかもしれない。

実際の仕事上では、社内の評価も高くプロジェクトのサブリーダーに抜擢されている辻や神楽と、俺の差はますます広がっていくばかりだった。

＊

飲み始めて数時間が過ぎて酔いがまわり始めた頃、神楽が突然口を開く。

「お前等さ、江間口女史ってどない思う？」

「…え？どう思うって」

「……ねえ、なのだ」

唐突な質問に、俺と辻は互いに顔を見合わせ首を傾げる。

江間口女史というのは、俺達より5歳ほど年上の会社の先輩だ。その気の強さと仕事のキャリアで、社内でも一目置かれている幹部候補でもある。颯爽とした容姿と相俟って、冷酷な鉄面皮とも陰では噂されていた。

何本目かの煙草を箱を叩いて取り出しながら、尋ねる。

「そつえば神楽の直属の上司だよな、江間口女史って」

「そや…な」

グラスの露で塗れたコースターを手で弄ぶ神楽。珍しく齒切れが悪い。
悪い。

あまり酒に強くない辻が、顔を真っ赤にしてあやふやな呂律で言

う。

「あれ〜？神楽君、ま、まさか〜！なのだ」

「……」

騒がしい居酒屋の中で、俺達の座敷だけが奇妙な沈黙に包まれる。神楽は大きくひとつ息をついた後、意を決したように言う。

「俺な…江間口女史に告白しようと思ってんねん」

*

煙草の灰をステンレスの灰皿に落とし、レモン色の灯りを背景にぼんやりと揺らぐ煙を見つめて俺は言った。

「ま、江間口女史と神楽はずっと同じ職場だったしな。不思議じゃないさ」

「そ、そうかマキ！？お、俺、へ…変やないか？」

「ちつともおかしくないのだ〜。ちよつと怖いけど、江間口女史は綺麗な人なのだ〜」

珍しく辻が大声を出してはしゃぐ。

「……」

嬉しいような恥ずかしいような、奇妙な照れ笑いを浮かべる神楽のグラスにビールを注ぐ。

「ツワモノだけど、神楽らしいよ。けっこう似合うかもしれないな」

「お…おお。そない思つか？」

「勝算あるのだ〜？」

「そんなもんは…分かるわけないやろ」

そう言うつと、神楽はグラスのビールを一気に飲み干す。

*

そつだ。やる前から計算したって仕方ない。恋愛なんて、タイミ

ングと勢い。

実直型の性格から言って、きっと神楽は明日にでも江間口女史に話をするだろう。

そして何の根拠もないけれど、神楽と江間口女史はうまくいくような気がした。

同年代の人間は皆仕事や恋愛を謳歌してるというのに、家に籠ってひたすら小説なんか書いてるのは俺だけかもしれない。

人間の位置が座標で示せるとしたら、結びついた相手の座標との距離が式として表せる。ならばその式を導く過程が、恋愛とも言える。

けれど今、俺の軸線上には誰の姿も見えない。

果てない妄想と文字達だけがその座標を取り囲み、俺を埋もれさせていく。

その先に、いったいどんな式が導かれるというのだろうか？

「なんか……いいな。お前達」

「ん？何か言ったのだ？マキ君？？」

「いや、何でも。それより次、何飲む？」

不思議そうな顔をする辻にドリンクのメニューを渡して、俺はまた煙草に火をつけた。

第4話 天敵、リチウム登場

じつとりとした梅雨も終わり、次第に季節は夏に移り変わろうと
していた。

りもんの水槽の水を入れ替えていると、珍しく携帯電話が鳴る。

普段はめったに電話には出ないのだが、ディスプレイに表示され
た東川咲奈の名前を見て、思わず通話ボタンを押してしまう。電話
口から声優さんのような可愛い声が届いてきた。

「マキさんですか？」

「はいそうです」

「ぷっ！ そんなにかしこまらなくても」

「俺、電話で話すのって苦手で…」

「チャットやメールじゃ軽快なのに、あはは」

この間映画に誘われて以来、東川咲奈とは頻繁にメールやツイッ
ターで連絡をとるようになっていた。内容は映画や音楽の話など他
愛ないものだったが、明らかに彼女との距離は縮まった気がする。

「そういえば、いつ映画観に行きます？」

「ん、近いうちに」

「またあゝ」

脱力混じりの笑い声が携帯電話から聞こえてくる。適当に言葉を
濁していても、東川咲奈はどこか愉しそうだ。

別に映画が嫌いな訳じゃないし、好きな作品に関してはマニアッ
クなくらいだ。だから余計に誰かと映画に行くと困ることがある。

まばたきするのも忘れるほど、映画に見入ってしまうのだ。会話

どころかエンドロールが流れて館内が明るくなるまで、俺はまんじりとも動かない。

大学の頃唯一つき合った当時の彼女に言われたことがある。

“ 牧本君って、私が隣に居るの忘れちゃってるよね ”

―どうも俺は、デートで映画を愉しめるタイプでは無いらしい。

「この間、会社の近くに大きなシネコン出来たの知ってますか？」

「あ、いや…」

「じゃあ場所はメールに添付しますね。日にちは会社のメッセージヤーで相談しましょう」

「え、行くの決定？」

「決定です」

断定口調でそう言った後、東川咲奈は電話口で軽やかに笑う。栗鼠のように黒い瞳で微笑む、彼女の姿が眼に浮かんできた。

「はは…了解」

「絶対ですよ」

人差し指で頬を掻きながら、相槌をうつ。あの屈託無い笑顔が見れるなら、たまには興味の無い映画を観るのも悪くないのかも。

*

東川咲奈との電話を終えおもむろにパソコンの電源を入れていると、りもんが不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「あれ…？どことなくニヤついてませんか？」

「元々こういう顔だ」

「赤くなってますよ」

りもんが俺の頬をぷにぷにと指でつつく。その指に齧りつく真似をすると、きやつきやと陽気にりもんは笑う。

「でも、久しぶりじゃないですか？」

「何が？」

「女っ気」

「ほっとけ」

どこことなく気恥ずかしさもあり、俺は素っ気無い風を装ってパソコンの前に座る。

【銀色塔】というハンドルネームで、俺は幾つかのサイトに小説を公開していた。

大抵のサイトは投稿作品に読者が自由に意見や感想を書き込めるようになっている。自分の小説に対する評価を辿っていくと、やたらと辛辣な一件のコメントを見つけた。

『語彙の貧弱さもあり、細かい描写が雑。主人公の心情も掴み難く、物語として盛り上がり欠ける』

「うわあ、随分と手厳しい意見ですね」

後ろからディスプレイを覗き込みながら、りもんが言う。

「……むう」

「書き込んでるの、誰ですか？」

「こんな評価するのは、リチウムしか居ない」

「リチウム？」

パソコンデスクに頬杖をついて、苦笑いする。

ハンドルネーム【リチウム】は、昔からのウェブ上の知り合いだった。

【リチウム】を知ったのは、確かどこかの創作系コミュニティサイト。もう3年ほど前の話だ。

散文詩のような掌編を、毎日投稿してくる人物がいた。投稿量もさるものながら、それ以上にその硬質で殺伐とした作品の雰囲気圧倒された。

叙情感はあるのだがどこか覚めた視線で物語が描かれている。実

際どの小説を見ても、俺よりもはるかに書き慣れていた。

ハンドルネーム【リチウム】というのも、やけに無機質で皮肉な名前だった。

殆ど誰とも交流しないその作家に興味を惹かれ、作品に対するコメントを何度か書き込んでいるうちに、ようやく返事が来た。

『【銀色塔】、良い名前だね』

その余りにぶっきらぼうな物言いに、返す言葉を失った。他の参加者との数少ないやりとりから、【リチウム】が女性であることを知って更に驚かされた。

女性らしさの微塵も感じられないざらざらと乾いた作品を読む度に、突き放されたような距離感を抱く。そしてその距離感はある程度リチウムが意識して書いているものだということに、俺は数ヶ月も経ってから気付く。

一風変わったそのウェブ作家と知り合って、互いのメールアドレスを教えるまでに一年もの時間がかかった。とは言っても、メールの内容は大抵が互いの小説の感想なのだが。

その頃から、リチウムの批評の手厳しさは変わっていない。というか、俺の作品が褒められたことは殆ど無かった。

でも、何故かそれを不快には感じなかった。彼女の文章にそう思わせる説得力があるからなのか、単に俺が気圧されているだけなのか？

それは未だに自分でも分からない。

*

「マキさん、負けちゃだめです！何か言い返さない！」
りもんが俺の背中を両手で叩く。

「とは言ってもなあ…」

バツが悪そうに頭を掻く俺を見て、りもんが頬を膨らませる。

「はあゝ。創作男も女性には弱いんですねゝ」

「まあまあ、そう言うな」

りもんの頭を撫でながら、もう片方の手で煙草に火をつける。

実は何度かメールのやり取りをしてるうちに、リチウムが実は俺と同じ歳で、しかも同じ電車の路線に住んでいることが分かった。

近くて遠い存在だと思ってたネット上の知り合いと、実際にすぐ近くでやりとりしている。

もちろん会ったこともないし、それを互いに言い出すことも無かった。でも、もし、万が一…。

「…はは、ありえん」

煙草の紫煙を吐き出しながら、奇妙な妄想を頭から振り払った。

第5話 銀髪のシエリル

現実には映画のように毎日いろんなイベントがあるわけじゃない。何も変わらない一日だってある。いや実際、一年の殆どがそんな日の繰り返しだろう。

夜通しパソコンに向かって小説を書き続け、気付くとすっかり陽が昇っていた。

創作の思念が靄となって、部屋の中で煙草の煙とともに立ち込める。ここまで閉塞感が充満してしまうと、さすがに息苦しい。

ジャケットのポケットによれよれになった文庫本を入れて、俺は部屋を出た。

夏の訪れを感じさせる陽光を背に受けて、郊外に向かいシエリルを走らせる。

『シエリル』というのは俺の愛用の自転車である。もちろん流行のロードサイクルなどではなく、『ママチャリ』と呼ばれるきわめて普通の自転車だ。

「ええ感じやな」

「めいっばいタイヤに空気入れてきたからな」

「でも前ブレーキの効きが悪いわ。錆びてんちゃう？」

「そろそろ油、注さないとな」

銀色の髪を靡かせたシエリルが、さらにスピードを上げる。

もちろんシエリルも、りもんと同じ擬人化した人物だ。名前の由来は、サイクリングをしている時に何となく口ずさんだ『Every day is a Winding Road』からきている。

「今日はどこ行くのん？」

「郊外の森林公園なんてどうだ？」

サドルから腰を浮かしペダルに立ちあがると、照りつける陽射しの中、爽やかな風が頬を撫でる。

「ええなあ、天気良いし。めっちゃ気持ちいいわ」

薄いブルーの瞳を輝かせ、シェリルは振り返り微笑む。

じめじめとした梅雨から夏に変わる季節。ハンドルを左右に振って立ちこぎしながら見渡す世界は、いつもと少し違って見えた。

ポケットに押し込んだ文庫本と煙草と缶コーヒ―。それだけあればいい。

のんびりと芝生にでも寝転がって、歯車のように廻り続ける時間を止めるのもたまには悪くないだろう。

「着いたら膝枕したるさかい」

「ママチャリの膝枕か…」

「細かいことは言いつこなしや」

やたら大きな声で笑うシェリルにつられて、頬が緩む。

森林公園に近づくにつれ、人や車の往来も少なくなっていく。勾配の激しい坂道を登りきると、公園の入口の遊歩道まではなだらかな下り坂だった。

高揚してきた気分、自然とペダルを漕ぐ速度が上がる。

「もうちょいやわ。マキ、もっと飛ばさな」

「応！」

さらに前傾姿勢になりペダルを勢いよく踏み込んだ瞬間、歩道脇の茂みから突然何か小さい物体が飛びだしてきた。

「お、わっ！？」

瞬間的に視界の隅に映ったその緑色の物体を避け、咄嗟に俺はハンドルを切った。

*

コンクリートのざらついた感触。目を開けると、逆さになった世界が見える。

チカチカと射し込む陽の光だけが、ぼんやりと俺を照らしていた。

意識を取り戻すにつれ、次第に鈍い痛みが全身を覆い始める。

「いてて…」

俺の体は完全に歩道に投げ出されてしまったようだ。

かろうじて体を起こすと、シャツの右腕が破れておろし金で擦ったような肘の傷から血が滲んでいた。

よくあるジャックナイフターンを失敗した映像そのままに、どうやら俺は自転車から完全に宙に投げ出されたらしい。ロックしたブレーキが呻る金属音が、まだ耳の奥に残っていた。

「まいった…」

自転車でこれほど激しくコケたのは、小学生以来だ。

見渡すと、シェリルもそのまま歩道の柵に突っ込んで倒れていた。

「だ、大丈夫か！？シェリル！」

強かに打ちつけた膝にも力が入らなかったが、何とか足を引きずりながらシェリルに駆け寄る。

「…何か、ごっつい痛いんやけど」

茫然とするシェリルの腕が、曲がるはずの無い方向に曲がっていた。

「お、おわっ！シェリルっ！腕っ！腕っ！」

「…な、何やのこれっ！？」

自分の腕を見て、シェリルの顔からみるみる血の気が失せていく。そのハンドルは、完全にぐにやりと90度に折れ曲がっていた。

自分の痛みも忘れ、俺は口を半開きにしたまま言う。

「…これは、重症だ」

「ひいいん、どないしよう？マキ」

腕をとんでもない方向に向けたまま、シェリルが慌てて抱きついてきた。

「腕が、腕がこないになっちゃった…」

ぽろぽろと頬をつたうシェリルの涙を、指で拭う。

「だ、大丈夫だ。今から自転車屋行って修理しよう。腕くらいすぐ取り替えられる」

「ほんま？」

「ああ。今は痛いだろうけど、ちよつとだけ我慢してくれ」

「…でも、自転車屋さんどこにあるか分からんし、足も痛くて動かん」

シェリルの足元を調べてみると、チェーンも切れていた。

「これは…ひどいな」

眉をひそめる俺を見て、シェリルが俯いて心配そうに言う。

「ウチは安物のチャリやけど…、でもな…捨てられるんは嫌や」

普段の陽気さとは全く違う、気弱な表情を見せるシェリルに一瞬どきりとさせられる。

シェリルの頭をそつと撫で、その体をゆっくりと抱き起こす。

「何言つてんだ、もう5年も乗ってんだぞ。捨てられるもんか」

「置いてかへん？」

「絶対一緒に連れて帰る」

「…マキ」

さらに号泣して抱きついてくるシェリルを宥めながら、ふと気になって転倒した場所を振り返る。

道路脇の茂みから飛び出してきた小さな物体が、まだ道の真ん中に居た。

それは…、一匹の小さなカマキリだった。

カマキリは二本の鎌を構えて立ち上がった姿勢のまま、逆三角形をした複眼で俺達をきょとんと見つめていた。

「カマキリ…？」

小さく呟くと、カマキリは羽根をパタパタと何度かばたつかせた後、何事も無かったかのように茂みの中に引き返していった。

苦笑いしながら頭を掻く俺を見て、シェリルが言う。

「ほなら、マキはあのカマキリを避けようとして？」

「突然だったから、思わずハンドル切っちゃった…悪い」

がつくりとうな垂れる俺に、シェリルは折れ曲がった腕を絡ませる。

「轢かんで良かったやん。そういうマキの優しいところ、ウチ好きやで」

「……応」

「命は大切にせなな」

互いの体を支えあうように、シェリルと俺は元来た道を戻り始める。

初夏の陽が、緑色の葉の茂る木漏れ日の合間から射し込んでいた。

第6話 蠍

シエリルを修理してアパートの部屋に戻る頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

「うう、せつかくの休日に…酷い目にあった」

「まあまあ、ええやんか」

ピカピカの新しい腕と足回りを手に入れたシエリルが、ご機嫌で部屋の中を飛び跳ねる。

「…結局、ひどい出費だ」

「自転車ならもう一台、買えたんじゃないですか？」

俺の右腕に消毒薬を塗りながら、マリモのりもんが苦笑いして言う。

「あはは、何言ってるのー！ウチは一人しかおらんやろ？なあ、マキい」

ぴょんとベッドの上に飛び乗ったシエリルが、しなだれかかってくる。透き通るようなターコイズブルーの瞳が、俺の顔を覗き込む。

不思議な気分だった。

この部屋の中には、本当は俺一人しか居ない筈なのに。

ぐだぐだと文句を言いながらも、俺はいつまでも執着したものにこだわっている。

創作活動にしたって、そうだ。

小説を書き続ける作業を延々と何年も続けていくことに、何の意味があるのだろう？既にそれは「書くのが好きだから」という範疇ではなかったし、特に対外的評価に拘る訳でもなかった。

ただ、書き続ける先に何かが見つかるような気がした。

それだけの話だ。

「やっぱり損な性格ですね、マキさんって」

破れたシャツの裾を摘み、りもんが俺の腕に包帯を巻き始める。

「もって生まれた宿命やな。」さが”ってやつ?”

考えを読み取れるのか、シェリルは眼を細めて笑う。

疲労困憊で何の余力も残っていない俺は、力なく口の端を上げて笑しなかった。

*

その時、唐突に玄関のチャイムが鳴った。

「誰だよ?こんな時間に」

痛む膝を抑え、のそのそと立ち上がる。

この部屋を借りて3年になるが、新聞の勧誘や訪問セールス以外に誰も来たことがない。

「は…い?」

頭を掻きながら面倒くさそうにドアを開けると…、そこには、紫色の髪の毛を頭の左右で束ねた女の子が立っていた。その吊り眼気味の瞳に見覚えがあったが、どこで会ったのか思い出せない。

「あの…どちらさまで?」

いぶかしげに眉をひそめる俺の顔をまじまじと見て、その若い娘はようやく口を開いた。

「恩返しに来たぞえ」

「へ…?恩返し?」

言葉の意味が分からず玄関先で首を傾げていると、娘は突然刃渡り30センチはあろうかという大型の鎌を俺の方に向けた。

「おわっ!」

娘の手に握られた銀色に輝く草刈り鎌を見て、思わず一步後ずさる。

その様子を俺の背後から見ていたシェリルが、俺の焦燥など全く無視した暢気な声で言った。

「あんた、さっきのカマキリやない？」

「…え？」

啞然としながらシェリルと鎌を持った娘を交互に見渡す俺を尻目に、娘は表情を崩すことなく飄々と答える。

「そうぞえ」

「カ…カマキリ？」

吊り気味の赤い瞳。「ぞえ」という平安時代の公家のような奇妙な語尾。そして…手にした鎌。確かにそれは常人とは明らかに違う。どちらかと言えば、りもんやシェリルに近いかもしれない。

「やつぱりや〜」

能天気のパチパチと手を叩き、シェリルは暢気に笑う。さすが擬人化した者同士、シェリルにはすぐ娘がカマキリの化身だと分かったようだ。

「さっきは命を救ってもらったから、恩返しに来たぞえ」

鎌を脇差のようにベルトに収めながら、娘は相変わらず飄々とした口調で話す。

「いや、別に恩返しとかは…」

躊躇する俺の言葉を無視して、カマキリの化身はずかずかと家に上がりこむ。

「カマキリは情に厚い生き物ぞえ。恩返しするまではこの家に居るぞえ」

「とは言ってもなあ…」

首を捻る俺の腕を引っ張り、りもんが言う。

「いいじゃないですか。人が多い方が賑やかですよ」

「いやいや、俺以外人間じゃないから」

シェリルも後ろから俺に抱きついて、猫のようにゴロゴロと甘えた声を出す。

「んな堅いこと言わへんで」

「いやしかし…これ以上この部屋に擬人化キャラが増えても…」

「名前って何ですか？」

「決まってるじゃないぞえ」

「ほなカマキリの『鎌子』にしよか」

「こ、こらお前ら！俺の話を…」

「ウチは自転車のシェリルで、こっちがマリモのりもん」

「宜しくぞえ」

「こちらこそ、よろしくです」

「だ、だからお前ら！俺の話を…」

俺の意見が女性陣に聞き入れられる訳も無く、俺のアパートには3人目の擬人化キャラ『鎌子』が一緒に住む事になってしまった。

きよろきよろと部屋の中を見渡した後、鎌子は勝手にエプロンを付けて台所に向かう。

「お礼に、ご飯作るぞえ」

*

さすが鎌の使い手だけあって手際の良い鎌子の手料理が、次々と運ばれてくる。しかもどれもこれも、意外なほど美味しかった。

「牧本、たくさん食べて精力付けるぞえ」

「あ、ああ。ありがとう」

何故か鎌子は俺の事を”マキ”ではなく苗字の”牧本”と呼んだ。

俺の隣で箸を咥えたまま、りもんが神妙そうに首を捻る。

「どうかしたのか？りもん」

「マキさん。そういえばカマキリって、確か最後にメスがオスを……」

食べ切れないほどの豪華な料理を運びながら、鎌子はその赤い瞳を輝かせて言う。

「どうした牧本？もっととんどん食べるぞえ」

第7話 七夕夜想曲

ペダルを漕ぎながら空を見上げると、夜空が染まるくらいに満天の星が空を覆っていた。

珍しく晴れた今年の七夕。公募用の原稿を入れた封書をシェリルの前カゴに放り込んで、俺は近くのコンビニに向かっていた。

ショッピングモールのいたる所に、短冊の吊るされた笹の葉が飾られている。色とりどりの短冊のイルミネーションを眺めていたシェリルが、銀色の髪を夜風に靡かせ訊ねる。

「願いが叶うなら、マキはどんなことを短冊に書くん？」

円周状の光の輪を瞬かせる星空を見上げながら、交差点の角を曲がる。

「そうだな…俺好みの可愛い織姫さんと会えたらなあ…」

そう呟いた瞬間、浴衣姿の人影が目の前に飛び込んできた。

「う…あつ…！」

急ブレーキをかけたが避けきれず、俺は前のめりになったままその人影にぶつかる。

若い女の持っていたチラシが、勢いよく空中を舞う。

「ご、ごめんっ！大丈夫ですか！」

倒れたシェリルで痛打した膝を押さえながら、俺は慌てて人影に近づく。

「ってか痛いしっ！どこ見てんのよっ！」

どうやらビラ配りらしき浴衣を着た女が、腰を擦りながら怒鳴り返してきた。

(……あれ?)

その声と口調に、聞き覚えがあった。

いぶかしげに首を捻り、俺はその女の顔を覗き込んだ。

「お前…琥珀…か？」

*

眉をひそめ振り返った若い女は、やはり森琥珀だった。

「ってか束じゃないの。あーもう、最悪なんだけど」

俺の事を『マキ』ではなく『束^{たばね}』と呼ぶのは、親類しか居ない。

目の前で浴衣の裾をはたきながら頬を膨らませているのは、森琥珀。俺のじいさんの兄弟の奥さんの姉妹の孫のどうのこうのという、いわば遠縁の親戚だ。

大学に入って東京に出て来ているとは思って聞いていたが、まさかこんな場所で行くわすとは思ってもみなかった。

「お前こんな所で何やってんだよ?…しかもそんな格好して」

短い浴衣の裾から顫わになる太ももを視線を送りながら、しりもちをついてる琥珀の手を掴んで引き起こす。

「じ、じろじろ見んなよっ!エロ束っ!」

「相変わらずお前は口が悪いな。七夕に浴衣着てビラ配りかよ?」

「ってかバイトなんだから、仕方ないだろ!」

散らかったチラシを拾い集めながら、琥珀は悪態をつく。

「久々に会ったってのに…性格全然変わってないな、お前」

「悪かったわね」

集めたチラシを差し出すと、琥珀はそれをひったくるように奪い取る。昔からそうだ。親戚の集まりがある度に、俺と琥珀はいつも喧嘩になる。

「お前、この近くに住んでるのか？」

「悪い？」

「なら連絡くらいよこせつての。最近実家にも全然寄り付いてないって聞いたぞ」

「ってか、束には関係ないじゃん」

「まあ、そうだけども…」

俺は口ごもりながら倒れたシェリルを起こし、歪んだ前力ゴを力任せに曲げ直す。

「くそ、フレームも曲がっちゃった」

「あんたがボケーっと空見て自転車漕いでるから悪い」

「七夕だつてのに最悪だな、お互い」

道端に投げ出された原稿の封筒を拾い上げ、塗装の剥げた力ゴの中に放り込む。

「邪魔して悪かったな。…バイト頑張れよ」

「……」

琥珀は何も言わず、不貞腐れたように後ろを向いて緋色の髪の毛の髪留めを直していた。シェリルを押してその場を立ち去ろうとした時、琥珀の帯が曲がっているのに気づく。

「…ったく」

放っておくのも悪い気がして帯を直してやろうと近づいた時、突然琥珀が振り向いた。

「ってか、ねえ！束…」

「えっ…」

顔を上げたすぐ目の前に、琥珀の唇があつた。

一瞬だった。

それは触れるか触れないかくらいの、ほんの僅かな接触。

甘酸っぱい柑橘系の香水の匂い。赤毛の長い髪が俺の頬をさらさ

らと撫でる。

琥珀のピンク色の口紅が、俺の唇に掠った。

「…あ…」

弾かれたように俺達は互いに身を仰け反らせる。

慌てて自分の口に手をあてると、そこには艶のある琥珀のグロスの跡が間違いなく残っていた。

「う…わっ！ってか、うわっ…！」

目玉が飛び出すくらい大きく眼を見開いた琥珀が、ばたばたと両手を上下に振って大声を上げる。「な、何してんのよっ！束っ…！」

「え…いや…お、俺は帯をだな…直そうと…」

「さ、先に言いなさいよっ！」

「おお前が急に振り向くから…」

「このバカっ！」

顔を真っ赤にした琥珀は、手にしたチラシを俺の顔面に叩きつけて走り去る。街を行き交う人々のどよめきの中、駈けていく琥珀の後ろ姿を俺はただ見つめているしかなかった。

今日は七夕の夜。瞬くミルキーウェイが、甘い香りを残し夜空を覆い尽くしていた。

第8話 ギミック世界のワンダー！

絵に描いたような真っ白い入道雲が鮮やかな空色に浮かび、名前も知らない鳥が羽根を広げて空中を旋回している。

俺はぼんやりとそんな空を見上げていた。

「……………キ……………マキ！」

誰かの呼ぶ声で我にかえり振り返ると、神楽輝延が不思議そうな顔でこっちを見つめていた。

「…神楽？」

「何ボーっとしてんねん。道、こっちやて」

道を指差す神楽の隣では、辻健市が口に手をあててくすくすと笑っている。

そのすぐ先に建っている校舎の時計台の針が、10時を指していた。

「早よ行かんと、江間口女史に怒られるやん」

「そうそう。怒った時の部長の目は氷のように冷たいのだ」

校門に向かって足早に駆け出す、神楽と辻の後姿を茫然と見つめる。

（……………学校？）

肩に食い込むバッグの重みに気付く。

俺は紺色のバッグを肩に担いで、制服のズボンに手をつ突っ込んでいた。

白いシャツから、微かに芳香剤の匂いがした。

（……………制服？）

「…え？」

一筋の汗の雫が、頬をつたう。

*

「…あのさ、俺達って高校生だったわけ？」

「は？何言ってるの？暑さで頭どないかしたんか？マキ」

部室棟への階段を上がりながら、神楽は眉間に皺を寄せる。

「みんな無事に高校2年生なのだ。神楽君は危うく留年して1年生やり直すところだったけど」

「放つとけ」

笑って話す神楽や辻の様子は、いつもと何も変わらない。

古びた校舎に、壁の漆喰の匂い。埃の溜まった下駄箱。練習する運動部の掛け声。

見慣れた制服に、いつもの無駄話。

神楽はこの間の夏祭りの時に貰った『祭』と書かれたウチワを扇いでいる。色白の辻がこの暑いのに長袖のシャツを着ているのは、日焼けするのが嫌いだからだ。

そして俺のバッグの中は、いつもと同じ昼飯のパンと画材道具。

普段と何も変わらない日常なのに、この違和感は…何だろう？

窓から射し込む夏の陽がチカチカと白い光彩を瞬かせ、蝉の音がうるさいくらいに耳の奥でエコーしていた。

「本当に大丈夫？マキ君」

童顔の辻が、きょとんとした表情で俺の顔を覗き込む。

「あ…ああ」

「早く美術部の部室に行って、冷たいジュースでも飲むのだ」

「そっぴや今…夏休み…だよな？」

「ほんま。夏休みやってのに部活って。しかもなんつう暑さや」
俺の質問の意味を取り違えた神楽が、ウチワを扇ぎながらシャツの前をはだける。

「夏休み終わったら、すぐ秋の文化祭だから仕方ないのだ」

「お、ええぞ！時期部長候補」

「茶化さないでほしいのだ」

二人のやりとりも、いつもと何も変わらない。

「なあ辻。…今日って何やるんだっけ？」

「今日は部員全員で出展テーマの打ち合わせなのだ」

「ああ…確かに、そうだったな」

苦笑いしながら、俺はばさばさと頭を掻く。

なんだろう？分かっているはずなのに記憶が混乱している。

俺は高校生だ。

神楽と辻は1年からのクラスメート。成績は3人そろって良くない。

そして俺達は美術部に所属している。絵に興味も無い神楽や辻を、無理やり美術部に引き込んだのは俺だ。

学校は夏休みだが、今日は部活の活動日。だから俺達はこうして画材を持って、午前中から学校に来ているんだ。

「そう…だよな」

腕を組んで頭を捻りながら廊下を歩いていると、背後から声が聞こえてきた。

「おはようございます」

弾かれたように慌てて振り返ると、そこに制服姿で立っていたのは……東川咲奈だった。

窓から射し込む陽光の照らす中、東川咲奈はいつもと同じ笑顔で両手を後ろに組んで立っていた。

水色のブラウスに白いニットベスト。大きめのリボン。チェックのミニスカート。まさに絵に描いたような制服姿だった。

「うーす」「おはようなのだ」

平然と挨拶をする神楽と辻の横で、俺だけが制服姿の東川咲奈を見て喉まで出かかった”コスプレ”の単語を飲み込みながら、ひどくぎこちない挨拶を返す。

「お…お、おは…よう！東川」

「どうしたんですか？マキ先輩」

眼鏡の奥の栗鼠のように大きな眼を輝かせ、東川咲奈は首を傾げて俺を見る。

「え、いや…今日も暑いな！あ…ははは！」

「…先輩、何かいつもと感じ違いませんか？」

「そ、そんなことないって！」

「そうですか？」

怪訝そうな目つきで覗き込む16歳の東川咲奈の顔が、すぐ間近に迫る。

俺はあたふたしながら、あらぬことを口走ってしまふ。

「そ、そっぴや…今度映画観に行くんだっけ！？二人で！」

……。

この暑さの中、一瞬で周りが凍りつくような沈黙。

神楽が扇いでいたウチワをポロリと落とす。ジージーと鳴く蝉の声だけが、さらに静寂を際立たせていく。

「な！な！なな何言ってるんですかつ！」

その瞬間、湯気が立つほど顔を赤くした東川咲奈が俺を思い切り突き飛ばす。

「げはっ！」

何が何だか分からないまま、俺は後頭部を柱に強打していた。

第9話 現実と小説の狭間で

ちかちかと目の前を飛び交う漫画で見たような星達と、後頭部に走る強烈な痛み。

目を開けると、俺はキーボードに突っ伏していた。

「い、痛え…」

後頭部を押さえながら顔を上げると、りもんとシェリルが俺の顔を覗き込んでいた。

「目が覚めたみたいです」

「ほんま大丈夫かいな？」

りもん達はいつになく心配そうな表情で、俺を見つめている。

「…一体、どうなってんだ？」

振り返ると、そこには明らかに変形したフライパンを持つ鎌子の姿があった。

「牧本が意識を取り戻したぞえ」

「お、お前…まさかそれで？」

「マキさんってば、PCの前で気を失ってたんですよ」

「そうやで。あんた目見開いたまま全く無反応やったから、鎌子がちよつと小突いただけや」

「……」

頭に出たたんこぶを擦り、コントのようにさぞかし良い音がしたんだろうな、などどうでも良いことを思った。

*

見事に膨らんだ俺のたんこぶをタオルで冷やしながら、シェリル

と鎌子が話す。

「でもホント、マキってば画面見つめたままフリーズしてて焦ったわ」

「牧本は完全に瞳孔開いてたぞえ」

煙草に火をつけ、紫煙が揺らぐ部屋の中を見渡しながら記憶を整理してみる。

「りもん、俺が気を失ってたのってどのくらいの間だ？」

「うーん、30分くらいですかね」

「確か俺、会社から帰ってきてすぐ小説書き始めたんだよな…今日一日中会社で考えてた新作の」

「仕事せえよ、この男は」

呆れたように言うシェリルを尻目に、煙草を啜えたままパソコンの画面に映し出されたエディタを捲る。

「そうだ…これ…」

画面に現れた小説の文字列を見て、啞然とする。

思わず椅子から立ち上がった俺の背中越しに、慌てりもんが画面を覗き込む。

「この小説ですか？…ん」『ギミック世界のワンダラー』？

「お、俺…」

落ちかけた煙草を灰皿で揉み消し、かろつじて呟く。

「俺…この小説の中に居た…さっきまで」

*

さっきまで体験していた出来事について話し終わると、シェリル達は神妙な表情を崩さず互いに顔を見合わせる。

「じゃあ…マキさんの意識がこの小説の中に入り込んだってことですか？」

「まあ…そういう解釈になるな」

「牧本はきつと、小説の世界を擬似現実として体験してたのぞえ」
ディスプレイ画面を鎌子が指で突く。

「感情移入もここまで来たら、ほぼ変態やな」

「う…うつむ」

返す言葉が見つからず、俺はうな垂れるしかなかった。

さっきの真夏の校舎の中での出来事が、記憶の中にまざまざと蘇る。

書きかけの小説と同じように物語は進んでいた。俺は高校生の主人公になり、登場するのは神楽や辻、東川咲奈といった現実の俺の周りの人間達。

「牧本は今、小説と現実の区別がなくなってるぞえ」

「……」

腕組みをして考え込む俺の肩を、りもんがそつと擦る。

「どれだけ精神が破綻してても、マキさんはマキさんです」

「全くフオローになってないが有難う」

さっきからマウスを弄っていた鎌子が、ディスプレイをこっちに
向けて告げる。

「困った時は創作仲間聞くのが一番ぞえ。ちょうど今、チャット
のお呼び出しが来たぞえ」

「チャット？誰から？」

「牧本の天敵ぞえ」

「う、リチウムかつ！？」

第10話 銀色塔とリチウムの齒車

リチウム：私の作品にレビューしないなんて、君も随分偉くなったね
銀色塔：そ、そんなことは…はは

チャットのやりとりは、いつもリチウムの上から目線の挨拶で始まる。

それが彼女なりの冗談だとは分かっているけど、初手から気圧されてしまう。

銀色塔：まだ読んでないけど、相変わらず硬質な作品みたいで…

リチウム：褒めてんの？それ

銀色塔：も、もちろん。ハードボイルドな作風で

リチウム：は！？ハードボイルド！？

銀色塔：いやいや！ジャンルはそうではなく…

画面の前でがつくりとうな垂れる俺の背中を、気の毒そうにりもんが擦る。

「マキさん、負けないで〜！」

「お、応！」

いつまでも圧倒されている場合じゃない。慌てて間髪入れずキーボードを叩いた。

銀色塔：そういえば、ちょっと相談あるんだけど…

リチウム：今更プロットの立て方とかやめてよ

銀色塔：いや、さっき小説書いてる時、ちよつと不思議なことがあつて…

リチウム：ん？

さつき俺の身に起こった出来事を、なるべく簡潔にしてレスを綴る。簡潔明瞭がモットーのリチウムにくだぐだと長い文章を送っていると、すぐ文章指南されてしまうからだ。

俺の後ろではりもん達が興味津々の様子で、チャットのやり取りを覗き込んでいた。

*

銀色塔　…という訳なんだけど、どう思う？

リチウム：……

椅子にもたれかかり大きく息をつく。

変人扱いされるのを覚悟で洗いざらい話してみたものの、珍しくリチウムの返信に時間がかかる。

3分ほど経ってから、ようやくリチウムのレスが返ってきた。

リチウム：君は病気だね。すぐ救急車呼んだ方が良い

銀色塔　…うっ！

リチウム：冗談よ。あはは

銀色塔　…笑えない…

リチウム：気にしなくて良いんじゃない？夢みたいなものよ

銀色塔　…リチウムはそういう経験ある？

リチウム：ない

銀色塔　……そうすか

リチウム：そもそも書き手がそんなに自分の作品に感情移入してちゃ、客観的に全体が見れないし

銀色塔　…確かに。そう言われると思った

リチウム：でもそれくらいの気概も、悪くないんじゃない？

銀色塔　…なら良いけど…

リチウム：そっぴゃ、その小説にはそのうち私も登場するの？
銀色塔　：え？

今日は珍しくリチウムの機嫌が良い気がする。人を寄せ付け
ない霧を醸し出す、刺々しさ文面から感じられない。
俺の考えを察したように、リチウムが続ける。

リチウム：今日は飲んでるから、機嫌良いのよ

銀色塔　：酒飲んでるのか

リチウム：そっぴゃ私、君の顔も知らない

銀色塔　：知り合ってから長いけど、まあそっぴゃね

リチウム：紫衣。坂上紫衣

銀色塔　：え？

リチウム：私の名前。『さかがみ』じゃなくて『さかうえ』だから

銀色塔　：本名？

リチウム：yeah

紫衣：坂上紫衣。

唐突に知らされたリチウムの名前に困惑し、思わずキーボードを
打つ手が止まる。

まさかネット上の知り合いであるリチウムの本名を知る機会が訪
れる日がくるなど、これまで想像もしなかった。

リチウム：おーい！何止まってるのよ。君の名前は？

銀色塔　：え？

リチウム：女性に先に名乗らせといて、そりゃ無いわ

銀色塔　：あ、悪い。俺は牧本束。束って書いて『たばね』

リチウム：ふーん。普段は何て呼ばれてるの？

銀色塔　：『マキ』が多いかな

リチウム：じゃあこれから、マキって呼ぶから

銀色塔　：俺は何て呼んだらいい？

リチウム：師匠

銀色塔　：おおおお！

リチウム：冗談。：紫衣でいいよ

銀色塔　：うん。：了解

チャットのやり取りを覗き込んでいたシェリルが、妙に覚めた目をして言う。

「何やこの会話。恥ずかしくて見てられへんわ」

「：うう、確かにそうかもしれん」

これまで有り得なかったリチウムとのやりとりは、妙にくすぐったい感じた。

酔ってるとはいえ、おそらくリチウムも同じような感覚なのだろう。それからはお互い照れ隠しのような他愛無い話をした後、どちらからともなくチャットを終えた。

*

「結局、現実と小説の狭間の相談はどこかに行ってしまったぞえ」
閉じられたチャットの画面を見ながら、鎌子が呆れて言う。

「マキさんの鼻の下が伸びただけです」

「確かに。マキ、創作と恋愛を混同したらアカンで」

「：は、ははは」

ひきつつた笑みを浮かべたまま、誤魔化すように俺は煙草に火をつける。

リチウムとは知り合って3年になるが、俺はまったく彼女の素性を知らなかった。

これまで実体感の無かったウェブ上の創作仲間が、現実としてすぐ身近に感じられるのは不思議な気分だった。

そしてこの時、俺はまだ気付いていなかったんだ。
俺の周囲の大きな歯車が、既にゆっくりと動き出していたことに。

第11話 琥珀ふたたび

参道の入口にシェリルを停める。

狐集神社と書かれた立て札から中を覗き込むと、夏の陽射しに照らされた池の向こうに本堂の建物が見えた。

「自転車は入れなさそうだから、シェリルはここに停めておくか」
滴る汗を服の袖で拭いながらスタンドを立てると、シェリルがあらさまに頬を膨らませて不満な表情を浮かべる。

「せっかくこない所まで来たのにー」

「自転車は参道に入れないから、仕方ないだろ」

「ちえっ。じゃありもん、マキのこと頼んだで」

「はい、了解です」

日光浴がてら水槽から瓶に移し変えてきたりもんが、手を大きく上げて返事をする。

「鍵ちゃんとかけてってえな。盗まれそうになったら大声出すから、すぐ戻ってきてな」

「鍵もチェーンも付けたから、大丈夫だ」

シェリルのサドルをぼんと叩いて、俺は参道に向かった。

木々の合間から射し込む陽光を見上げると、絵具のような水色の空の向こうに陰影のはっきりした入道雲が広がっている。乱反射する池の水面を眺めながら参道を歩くと、じゃりじゃりと心地良い玉砂利の音が響く。

池のほとりにある『狐集池』と刻まれた石碑を指差して、りもんが訊ねる。

「これ、何って読むんですか」

「狐が集まるって書いて、『こしわいけ』って読むらしい」

「へえ」

参道には水鉄砲を持った近所の子供たちが駆け回るだけで、参拝客の姿は殆ど無かった。

「にしても、全然人が居ないですね」

「なにせ1時間以上、自転車こいで来たからな」

汗ばんだシャツをばたばたと煽ぐ。

休日にわざわざこんな場所まで来たのは、森琥珀から送られてきた昨日のメールが原因だった。

『明日狐集神社に来て。大事な話があるから。――森琥珀』

突然のメールだった。

七夕の件もあったので無碍にする訳にもいかず、仕方なく俺は地図を持って指定された神社に向かった。

手洗い場の水に手を浸していると、きゃっきゃと笑いながらもんが手洗い場に飛び込む。

「きゃあ〜！冷たいです〜！」

「こ、こらっ！神聖な清め水に飛び込むな！」

「故郷の阿寒湖を思い出します〜」

湯船にでも入っているように手洗い場に浸かっているりもんを見て、苦笑いする。

漱いだ口を拭っていると、七夕の夜に触れた琥珀の唇の感覚を思い出す。

幼馴染で喧嘩相手でもあった筈の琥珀は、月日の経過とともに一人の女性に変わっていた。

「どうかしましたか？マキさん」

「あ、いや…何でもない」

頭の片隅に残っている記憶を振り払うように、俺は柄杓ですくっ

た水を頭からかけた。

*

神社特有の澄んだ空気の中、蝉の鳴き声だけが響く。

参道で辺りを見渡していると、唐突に俺を呼ぶ声が境内に響き渡った。

「束っ！たばねっ！ここ、ここっ！」

本堂の脇のおみくじ売り場から聞こえてきたその声に振り返ると、そこには巫女姿の琥珀が居た。

「え…？お前…」

周りの目など全く気にせず無邪気に手を振る琥珀の姿に、ふと昔の面影が見え隠れする。

「ってか来たな！たばね〜！」

セミの鳴き声が止むほどの甲高い声で、琥珀は裏口から駆け出してくる。

「恥ずかしいからデカい声だすな」

「また照れちゃって〜」

馴れ馴れしく琥珀は俺の腕に手を絡ませる。

「まさか…琥珀、ここで巫女さんやってんのか？」

「似合う？似合う？」

巫女装束の袖を握って、琥珀はその場でくるりとターンして見せる。白い小袖に緋袴、髪を後ろで結わえた見事な巫女姿だった。

「ってかどう？可愛いだろ？」

「ま、まあ…馬子にも衣装って感じだな」

「似合っつて言え！」

視線を逸らす俺の肩を小突きながら、琥珀は悪戯な笑みを浮かべる。

どうやら七夕のことなど、全く覚えていないようだった。

「というか、お前20歳超えて巫女さんやるなよ」

「しっ！このバイト18歳って言って入ったんだから」

小さく舌を出す琥珀の無邪気な仕草は、子供の頃から変わっていない。

「お前なあ…この間はミニの浴衣で、今回は巫女さんか？」

「ってか言ってなかったっけ？私のバイトって、コスプレ専属だよ」

「コスプレ専属？」

「そ。巫女さんに織姫にサンタ、バレンタインはキューピットだしハロウィンには魔女になるよ」

「はあ…」

「ってか信じてないのか？あっち見てみな」

口を尖らせた琥珀の指差す方を振り返ると、そこには一眼レフカメラを構えたいかにも胡散臭い男が望遠レンズのファインダー越しにこちらを見ていた。

「な、なんだありや！？」

驚く俺に向かって、カメラを構えたその男はファインダーを覗いたまま一直線に近づいてくる。

「う、わっ！」

その勢いに思わず仰け反ると、メタボリックな体型に長髪の男はカメラ越しにぼそりと言う。

「僕は森琥珀第一護衛隊隊長、島田以蔵と申します」

「ご…護衛隊？」

「左様。日夜、琥珀様をお守りするのが我が護衛隊の使命であります」

こんな分かりやすいキャラクタが現実存在していることに、俺は言葉を失った。

「し…知り合いか？琥珀」

「追っかけみたいなものよ、私の」

「お、追っかけ!？」

島田以蔵と名乗った男は、相変わらずカメラのファインダー越しに俺と琥珀を見つめる。

「それより、あなたこそ何者ですか？やけに琥珀様と親しいようですが…」

「あ…ああ。俺は琥珀の遠縁の親戚で…」

「幼馴染、というやつですか？」

「まあ、そんな感じかな」

「……それは…羨ましいです」

ファインダーを覗き込んだまま、以蔵はがっくりと肩を落とす。

そんな以蔵とのやりとりなどお構いなく、琥珀が俺の腕を無造作に引っ張る。

「ってかそれよりさ！さっきから束の隣に居る娘、誰よ？」

「え？」

「あ、確かに…僕も気になってました。その全身緑色のコスプレをした娘さんです」

「お、俺の隣って…？」

怪訝そうな顔をする琥珀と以蔵を横目に、誰も居ない参道を俺は見渡す。さっきから俺の隣に居る”緑色のコスプレ娘”と言えば一人しか居ない。

「はーい！りもんって言いますー！」

りもんは小学生のように勢いよく手を上げる。

「んゝ見たところ、あんた人間じゃないね。ってか妖怪か何か？」

「りもんは妖怪ではなく、マリモの妖精です」

「はーん、なるほどね」

納得したように琥珀は腕組みをする。

「え…琥珀…お、お前達、りもんが見えてるのか!？」
絶句する俺に冷ややかな視線を向け、琥珀がにやりと笑う。
「巫女パワー、なめんなよ」

*

「その頭に生えているのは、アホ毛ですか？」
「りもんのこれは、触手です」
「凄い。まるで本物みたいだ」
島田以蔵は相当りもんが気に入ったらしく、さつきから撮影会の如く写真を撮りまくっていた。
「お近づきのしるしに、是非ポーズを！」
「こうですか」
「おおっ！ナイスポーズです！接写接写！次は触角をつまんで」
「照れますね」
「おおっ！すばらしいっ！人間離れた可愛さですっ！」

日陰になった本堂への石段に座って、俺と琥珀はそんな二人の様子を眺めていた。

「まあ…人間じゃないからな」乾いた溜息混じりに琥珀に話しかける。「まさか擬人化した毬藻がお前達にも見えるとは思わなかった」

琥珀は吊り気味の瑠璃色の目を細める。

「ってかイメージの共有化みたいなもんじゃない？」

「そんなもんか？」

「そんなもんなのよ、現実なんて」

珍しくペシミスティックな言葉を口に出しながら、琥珀は悪戯じみた笑みを浮かべる。

俺は頬杖をついて、汗ばんだシャツを扇ぐ。

「琥珀、何か俺に用があるんじゃないのか？」

「あ、そうだった。つてか東、秋になったらこの神社でお祭りあるんだけど、空いてる？」

「まあ…たぶん」

「じゃ、じゃあ来いよ！狐火が綺麗なんだぜ！」

「へえ」

「つてか『へえ』じゃねえよ！絶対来いよ！約束だからな！」乱雑に緋袴の裾をはたいて、琥珀は立ち上がる。「じゃあ、今日は帰っていいから！」

「…え？用事つてそれだけ？」

「つてか、い、いいだろ！ネットアイドルの巫女姿見れたんだしっ！」

「メールで伝えれば断然早い話」

「うるさいなっ！アホたばねっ！」

小さく舌を出して、琥珀はおみくじ売り場に戻っていく。

感情が表に出そうになると、必ず舌を出し『アホ』と言うのが琥珀の昔からの口癖だった。今でも変わらないその仕草にどこかホツとしながら、靴を脱いで石段に足を投げ出す。

高くなつた夏の太陽が頭上から照りつけてくる。

ひんやりとした石段の感触が、素足に伝わってきた。

第12話 ギミック世界のワンダラー？

真っ赤にした顔を手で覆い、東川咲奈は疾風のように廊下を走り去る。

「ふええ…痛ええ」

柱に強打した後頭部を押さえて俺が目回していると、神楽があきれて言う。

「マキ、お前ホンマに大丈夫か？」

「……」

記憶の混乱は相変わらず続いていた。

ついさっきまで俺は別の世界に居て、今とは全く違う生活を送っていたような気がする。…あれは、妄想なのだろうか？

しゃがみこんだ辻が、俺の頭に出来たたんこぶを擦る。

「咲奈ちゃんがマキ君を好きなのは皆知ってるけど、付き合える筈がないのだ」

「へ…？なんで？」

尋ねると、辻はバツが悪そうに人差し指で頬を掻いて神楽と顔を見合わせる。

「だって…なのだ、ねえ」

小さく溜息をついた神楽が、俺の腕を掴んで引き起こす。

「お前には彼女、居るやろ？」

「俺に…彼女？」

その時、やたらと甲高い声が廊下に響く。振り返った瞬間、子供の頃から見慣れた無邪気な笑顔がすぐ間近に迫っていた。

「つてか束！おはようっ！」

「こ、琥珀っ！？」

飛びついてきたのは、制服姿の森琥珀だった。

「ってか久しぶりっ！寂しい思いさせんなよっ！」

「な、夏休みだから仕方ないだろ……」

「今度海行くよ！花火もキャンプも浴衣も、夏はイベント盛りだくさんだよっ！」

「いや、あのさ……」

俺の首にしがみついてクルクル廻る琥珀を、なんとか引き離す。

「神楽、まさか俺の彼女って……琥珀か？」

「ちやうちやう。お前ら親戚やろ？」

「ってか、遠縁だから結婚できるもんね！」

「あのなあ……」

記憶は相変わらず曖昧なままだけど、琥珀は確か……東川咲奈と同じ1年生だった気がする。

「でも琥珀、学校で何やってんだよ？お前美術部じゃ無いだろ？」

「ってか今日は、動画サイト投稿用のイメージビデオ撮影会」

「撮影会……ってことは？」

いぶかしげに辺りを見渡すと、窓の外にカメラを構えた人影が俺と琥珀を覗いていた。

「……やっぱり貴様か、島田以蔵」

「牧本くん、先輩を呼び捨てしてはいけませんよ」

「ファインダー越しにそう言っと、以蔵は窓から這い上がってくる。せ、先輩！？以蔵って先輩なのか？」

振り返ると、辻と神楽が両手を広げて呆れた表情をして答える。

「うちの学校で知らない人は居ないのだ」。3年の島田先輩

「”接写の以蔵”やな。ま、どっちかというと変わり者で有名やけどな」

「はあ…」

島田以蔵は制服のズボンの埃をはたきながら、琥珀に言う。

「さあ琥珀様、撮影会の用意ができましたよ」

「つてか、せっかく束に会えたのに」

「さ、護衛隊の皆が待ってますから」

以蔵に襟首を掴まれて引きずられていく琥珀が、大きく両手を振りながら叫ぶ。

「束！今度狐集神社の秋祭りに行くよっ！」

「へえ」

「つてか『へえ』じゃないよ！絶対行くよ！や、約束だからな！アホ束！」

舌を出して悪態をつく琥珀の声を聞きながら、ふと思う。

（どこかで…同じ場面があったような？）

窓の外に照らされた夏の陽光と同じように、いつまでも俺の記憶の欠片がチカチカと瞬きを繰り返していた。

第13話 21世紀ノワール

「あれ？マキさんも今帰りですか？」

「ん…ああ」

会社の帰りに駅で電車を待っていると、後ろから珍しく東川咲奈に声を掛けられる。

雑然としたプラットフォームの喧騒の中、隣に並んで立った彼女はまじまじと俺の顔を覗き込んだ。

「映画観に行く約束、覚えてます？」

「あ、ああ…もちろん」

ホームに入ってきた地下鉄の無機質な銀色の車両に乗り込みながら、ネクタイを緩める。最近は琥珀に振り回されっぱなしで、東川咲奈との映画の約束もまだ実現していなかった。

並んで吊革に掴まりながら、ぼつりと愚痴る。

「やっぱり会社員は向いてそうにないな、俺」

投げやりな俺の言葉にも、東川咲奈は笑顔を崩すことなく話しかけてくる。

「はいマキさん。飴あげますから」

「子供か」

栗鼠のようにくりくりした瞳を眼鏡の奥で輝かせ、東川咲奈は鞆から取り出したマーブル模様の飴を俺に手渡す。

「東川って、いつもどんな映画観るの？」

「そうですね。1950年代フィルム・ノワールとか」

「…マジで？」

まさか映画の趣味がここまで一致するなんて、全く予想していな

かった。シニカルで破滅的なノワール映画が趣味の女性など、これまで会ったことがない。

「そういう退廃性や閉塞感、私、嫌いじゃないんですよ」

「普段はそんな風に見えないけど……」

「人って、いろんな面を持ってますからね」

車内の白い電灯に照らされた彼女の横顔は、どこか少し寂しそうに見えた。

電車が次のプラットフォームに入り、窓から見える誘導灯の単調な風景が急に明るくなる。アナウンスを聞いた東川咲奈が、口の端を上げて微笑む。

「あ、マキさんごめんなさい。ここで乗り換えなんで……」

「あ、そうなんだ」

「じゃあ、明日、また」

ホームに下りた小柄な東川咲奈の後姿を、電車の窓から眺める。ゆっくりと走り出した電車に向かって、彼女は小さく手を振った。

その時、ふと思い出す。

確か彼女が普段通勤で使っているのは、地下鉄の路線じゃなかったはずだ。

「あれ……？」

足早に通り過ぎる人混みの中でホームに一人だけ立ち止まる東川咲奈の姿が、次第に小さくなっていく。彼女は俺の乗った電車を、いつまでも見つめていた。

*

翌日、東川咲奈が会社を辞めるのを知った。

「ああそう、東川さんは盆休み明けで退職するから」

書類を提出しに行った時に課長から聞かされたのは、その一言だけだった。

茫然とデスクに戻り、引き出しを開けて彼女に貰ったキャンディの一つを口の中に放り込む。見ると東川咲奈はいつも通り、笑顔を絶やさず仕事をしていた。

何となく、分かった気がする。

唐突に映画に誘ったのも、昨日俺の使う電車の路線で偶然を装って乗り合わせたのも――。

「地元に戻るらしいぜ」

「ボーナズ貰ってから辞めるんだから、今の子はしっかりしてんな、ははは」

「それより次の人員補充は……」

彼女の居ない所で囁かれる職場の同僚の陰口を聞きたくなくて、俺は席を立った。

喫煙所に向かう途中にすれ違った東川咲奈が、いつものように微笑んでくる。

「東川……」

声をかけると、彼女は黙ったまま首を少し傾げる。ほんの数秒の沈黙が、今はそれを語るべきタイミングではないことを示していた。

「……今度、メールするから」

「……はい」

それだけの短い言葉を交わし、職場に戻る彼女の後姿を見送る。

甘酸っぱいキャンディの味だけが、口の中にいつまでも残っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3153y/>

ギミック世界のワンダラー

2011年12月3日22時49分発行